

# エマソンの『自然』における “Spirit” と “Genius”

## —— “Spirit” and “Genius” in Emerson’s *Nature* ——

小 田 敦 子

(Atsuko Oda)

*Nature* (1836)と“The American Scholar”(1837)はRalph Waldo Emersonの代表作として並べられることが多いが、学生への講演として考えられたため趣旨を追い易い後者に比べて、最初は匿名で発表された『自然』は、決してエマソンの代表作としての真価のわかり易い作品ではない。しばしば、エマソンの『自然』はタイトルが適切でない、エマソンが書こうとしたのは自然ではなく人間だ、或いは、超自然的なものであると批判されてきた。タイトルが象徴するもので言えば、『自然』が提示しようとしたのは、「自然」、つまり、物理的な「自然」の重要性であるというのが本稿の立場である。

『自然』の執筆過程において、エマソンは最初、現行の1章から6章にあたる部分を一編として「自然」という題をつけた。それと対になる別のエッセイ“Spirit”を書き終わる頃に、二つのエッセイを一冊の本にすることを考え、両者の不統一に悩みながらも、最終的には「自然」という題で出版した。B. L. Packer は、この「自然」と「霊」との対置の背後に、両者を全く対立的に捉える Coleridge の用語法の存在を推定し、「自然」という題の選択は、最後が「霊」に行き着く点で読者を混乱させるものであり、「自然」という題が、「自然と霊」という題と等価であると考えた点で、コールリッジの用語法を覆すものと述べている。<sup>1</sup> コールリッジの用語の背景にはキリスト教的な二分法の確たる伝統もあるだろうが、エマソンはそのようなプラトニズムとキリスト教とが合体した思想の伝統に異を唱えたと言えよう。1849年に *Nature: Addresses, and Lectures* として『自然』を再出版した際に、エマソンはモットー(巻頭に引用する題辞)をネオ・プラトニスト、プロティノスの引用から、自作の詩に変

えた。この変更はプラントンより前の時代のギリシアの自然哲学へのエマスの関心を、また、1840年代のエッセイ、“The Method of Nature”と“Nature”との両方で言及される地質学的知見が明示する進化論的な考え方、つまり、1833年にパリ植物園の標本室で「博物学者になる」と決意した時からあったエマスの自然科学への関心をより直接的に伝えている。<sup>2</sup>

しかし、キリスト教の自然観、世界観とは相容れない性質を含む「自然」を、「自己信頼」を主張したエマスでさえ、読者に理解される言葉を探す過程では率直に語ることを控えざるをえなかった。伝統的なピューリタン文化と博物学者的自然観との間を行きつ戻りつするエマスを反映して、エマスの『自然』は読者の多様な解釈を許容し、「詩」と揶揄されるような捉えどころのないものになっている。<sup>3</sup> しかし、1840年代のエッセイを待つまでもなく、『自然』においても、エマスは明らかに物理的「自然」をより積極的に重要な要素として捉えようとしていることを、自然と対立する“Spirit”という言葉が『自然』の中でどのように使われているかを検証することから考えてみたい。

## I “Spirit”と“spirit”

「自然」の下位区分であるかのように、『自然』における“Spirit”は、物質と精神の二分法による“Idealism”を越えた概念として第7章の題になった。それに続くのが最終章“Prospects”であることから、“Spirit”は『自然』の結論とも言える概念であると予想される。大文字で書かれれば、三位一体の「聖霊」を表し、小文字では人の心や精神、或いは、勇気をはじめ、誉められるべき力、美德を表す、神と人とをつなぐ幅広い言葉であるが、自然との関係で言えば、自然と対立し、自然の上に立つ神的な力とまずは理解されるだろう。エマスの『自然』は自然との関係において、このような“Spirit”の概念を再定義しようと試みる。しかし、この語がもつ容易に「神」と言い換えられる強いキリスト教的連想のために、エマスが『自然』において開示しようとした自然との“an original relation”「独自の直接的な関係」(7)は曖昧になっている。序章の

冒頭にある以下の引用文は、自然を基にした自分たちの仕事、法、礼拝を求めようと呼びかけるエマスの革新的姿勢を示している。

Embosomed for a season in nature, whose floods of life stream around and through us, and invite us by the powers they supply, to action proportioned to nature .... Let us demand our own works and laws and worship. (7) <sup>4</sup>

ここで言う人間の内と外を貫いて流れる「生命の流れ」が“Spirit”に当るが、それは人間に属する力である“spirit”でもある。「霊」は自然の力として捉えられている。エマスは自然を「霊的な力」が世界を創造していく行為、動きと同一視しており、後のエッセイ「自然」で、“*natura naturans*”「産み出す自然」(546)と呼ばれる「創造力」としての自然に非常に近い概念が提示されている。『自然』で最も有名な一節、「私は透明な眼球になる」(10)も上述の引用と同じ思想が語られているのだが、そこでは「自然の生命の流れ」は、『普遍的存在』の流れ、つまり、「神」と言い換えられ、自然を支配する神、さらには、“Nature always wears the colors of the spirit.”(11)のように、自然は自然を見る人間次第であり支配者は人間だというイメージが前面に出てくる。

この神から人間、自然へという序列をエマスは控えめにだが、修正しようとしている。透明な眼球の比喩が示すエマスの忘我の瞬間は、また一方では、「人と植物の間の秘密の関係」“an occult relation between man and the vegetable”(11)を知る喜びとして捉えられてもいる。この風変わりな印象的な語句だけでなく、第2章「有用なもの」からの以下の引用にも共通するのは、エマスの博物学者的な関心である。

The misery of man appears like childish petulance, when we explore the steady and prodigal provision that has been made for his support and delight on this green ball which floats him through the heavens. (12)

人間を養ってきた自然の着実で浪費的なまでに豊かな産出の営み、天空に人間

を載せて浮かぶ緑の地球を見る宇宙的な視野は、地質学者的な視点、そこから始まったエマスの進化論への関心を暗示している。この後に続く、天使の仕事よりも自然の仕事がすばらしいと言わんばかりの修辭もまた、キリスト教文化よりも自然の側に立つ彼の立場を冗談めかして語っている。人間と自然とのこのような関係への言及は、エマスがエッセイ「自然」のなかで、地質学が教えた「自然の長い周期性」と呼んだ認識に基づく。<sup>5</sup>

Geology has initiated us into the secularity of nature, and taught us to disuse our dame-school measures, and exchange our Mosaic and Ptolemaic schemes for her large style. We knew nothing rightly, for want of perspective. Now we learn what patient periods must round themselves before the rock is formed, then before the rock is broken, and the first lichen race .... (546)

自然が長い時間をかけてゆっくり変化していく過程で、岩ができ、羊歯が生まれ、植物、動物への扉が開き、人間があるという時間的・空間的に巨大な見通しの中でこそ、物事は正しく捉えられるとエマスは考える。*OED* はこのエマスからの引用を“secularity”という言葉が“The character of having long periods”、「長い周期をもつ性質」という意味で使われた初出の例としてあげている。この語の基となった“secular”という形容詞は *OED* によると、「幾時代も続く」という意味で、Donne や Milton によっても使われていたが、現在では、1801年 *Monthly Review* 初出の科学的な意味、「途方もなく長い時間をかけて変化する」という意味でのみ使われるという。エマスの詩“Monadnoc”の中の“Slowsure Britain’s secular might”も、前者の用例として *OED* に採用されているが、エマスが“secularity”という言葉が必要としたのは、後者の地質学的、天文学的な意味においてであっただろう。*Nature* 執筆と同時期の講演“The Relation of Man to the Globe”の中には以下のような発言がある。

I have spoken of the preparation made for man in the slow and secular changes and melioration of the surface of the planet. <sup>6</sup>

岩や植物が人間を産み出したとみる「自然の長い周期性」への認識は早い時期からエマスにあった。上の引用中「人間のためになされた準備」という言い方は人間中心主義を強調するものだが、同時に、エマスが語ろうとする「父祖のものとは違う新しい世界の見方」<sup>7</sup>は、自然に由来する力を頼みとする人間と自然との関係であり、父祖たちの考えた支配者としての人間という見方とは違うものが含まれている。

## II 隠された“Genius”

宇宙大の時間感覚から見られた、人間も含めた自然こそ、エマスが『自然』において提示したい、教会の教えるものとは違う、“secular”「世俗的な」自然であった。最終章「展望」においては、真理の探求者として「博物学者」が登場し、エマスを自然科学に向かわせた彼のバリでの実体験と同様の、「博物学の標本」に対する「ある神秘的な認識と共感」が語られるのだが、この自然科学への志向は、それを打ち消すように、エマスが否定しようとした過去の伝統的な考え、人間が自然の支配者であるという結論に向う。エマスも好んだ17世紀宗教詩人 George Herbert の「人間に関する詩」からの引用、“All things unto our flesh are kind, / In their descent and being; to our mind / In their ascent and cause.”、或いは、“More servants wait on man / Than he’ll take notice of.”(52)などは、前述の「人間のために準備をした自然」というエマスの自然観と似ており、ハーバートの詩は明らかに人間が主人であるという序列を強調するものである。しかし、オルフェウスの詩人が登場するこの章の文脈では、その意味が転換しうる曖昧な引用とも読める。次に続く「オルフェウスの詩人」は、自然の「長い周期性」を次のように言い換えている。

The foundations of man are not in matter, but in spirit. But the element

of spirit is eternity. To it, therefore, the longest series of events, the oldest chronologies are young and recent. In the cycle of the universal man, from whom the known individuals proceed, centuries are points, and all history is but the epoch of one degradation. (45)

この引用にも曖昧なところがある。「物質」と「霊」との対立は伝統的だが、霊の元素である「永遠」は、「出来事のもっとも長い連なり」や「普遍的人間の周期」から成るという説明によれば、神に由来する霊の永遠ではなく、変化する世界を司る「自然の長い周期性」を意味している。ここにも『自然』に潜在する博物学者の視点が垣間見えている。

このように、『自然』においてはその題にもかかわらず、エマスの語り方は自然に抑圧的だ。『自然』と同時期に書かれた詩では、より率直に自然の全体性や生成力が語られ、“spirit”という言葉よりも、たとえば、“Woodnotes I”では、“the genius of God”というように、“genius”という言葉が使われる。自然が産んだ人間は、丘や雲の「似姿」のようだといわれる。古代ローマで人の誕生時にそれぞれに与えられる守護霊である“genius”は、“spirit”よりも、自然から生まれた人間を喚起するにふさわしいと言えよう。エマスのまた別の詩“Hermione”では、“genius”は天空の軌道を動く、宇宙的生成力、運命の力を与えられている。エッセイでも、“The Method of Nature”では、自然の方法とは即ち“genius”であると言い換えられ、“Nature”では、自然と人間との同種性が古代ローマの「血統貴族」仲間という比喻で、以下のように語られる。

The muse herself betrays her son, and enhances the gifts of wealth and well-born beauty, by a radiation out of the air, and clouds, and forests that skirt the road, --- a certain haughty favor, as if from patrician genii to patricians, a kind of aristocracy in nature, a prince of the power of the air. (544)

『自然』の第3章「美」に典型的に現れる美しい風景描写は、この引用の語る

自然の潤沢で高貴な、人間への贈り物、つまり、自然の霊的な「力」が人間を貫いて流れていくものであることの例である。それを『自然』では、“spirit”と呼ぶことが多く、僅かに登場する“genius”を「天才」ではなく、天才であるとしても、それはむしろ「自然の創造的霊的力」による天才なのだと言わなければならない。それは難しい。

次にあげる第 3 章「美」からの引用は、比較的明らかに自然の力としての“genius”に言及していると考えられる。この例も「自然の美だけではむなしく、人間の意志と結びつかなければならない」というエマソンの自然についての根本的姿勢を例証する文脈におかれると、人間論の方に強調が移ってしまいがちだ。しかし、エマソンが新たに主張したいのは、人間は自然の元素からできており、それを肯定的に考慮することが必要だという、人間=自然論ではないか。

Nature stretcheth out her arms to embrace man, only let his thoughts be of equal greatness. ... A virtuous man is in unison with her works, and makes the central figure of the visible sphere. Homer, Pindar, Socrates, Phocion, associate themselves fitly in our memory with the geography and climate of Greece. The visible heavens and earth sympathize with Jesus. And in common life, whosoever has seen a person of powerful character and happy genius, will have remarked how easily he took all things along with him,---the persons, the opinions, and the day, and nature became ancillary to a man. (17)

「高德の人は自然の営みと一致している」と言って列挙されるのは、「ギリシアの地理と気候」に結びついた、都市国家の時代以前の自然哲学を奉じた古代ギリシア人であり、体制順応ではないアテネ人、体制に属さず、天地の間で生きたイエスだ。彼らの“genius”とは、「自然を味方とする」ことのできる、自然に等しい力であると説明されている。自然を基盤にした人間の力、“genius”を念頭におきながら、伝統的に精神を表してきた“spirit”という言葉を使うエマソンが『自然』で試みなければならないことは、“spirit”の含意を自然と結びつ

けることだ。自然と人間の思想が結びつく端的な形は、言葉である。次に、第4章「言語」を考えてみる。

### III “Nature Is the Symbol of Spirit.”

ここでもエマスンはず、言語は自然が人間に従属して用立てるものだという前提から話を始め、「自然は思考の乗り物だ」<sup>8</sup> という言語論を三重の意味で以下のように説明する。

1. Words are signs of natural facts.
2. Particular natural facts are symbols of particular spiritual facts.
3. Nature is the symbol of spirit. (20)

ここでも、命題の各々を説明するにあたっては、「博物学」が「超自然学」には有用であると明言することから始める。有用性だけが博物学の利点なのではなく、「博物学」を持ち出すことで、自然を強調しようという意志を垣間見せる。命題2と3は、特殊と普遍の差とみえるが、この間の飛躍は意外に大きい。

言葉が自然を象徴とするだけでなく、自然が思想を象徴しているのだという第2の命題は、これまでの歴史において自然がいかに思想や宗教の言葉となったかを指摘する。

And the blue sky in which the private earth is buried, the sky with its eternal calm, and full of everlasting orbs, is the type of Reason. That which, intellectually considered, we call Reason, considered in relation to nature, we call Spirit. Spirit is the Creator. Spirit has life in itself. And man in all ages and countries, embodies it in his language, as the FATHER. (21)

自然を神の言葉として捉えた旧約聖書のタイポロジーの予兆という意味でのタイプ、或いは、プラトンの「原型」という意味でのタイプ、この2つの思想



の伝統が合成された西洋文化の伝統に則って、エマスもよくタイプという言葉を使う。上の引用では、その他にもエマスが世界を理解しようとして学んだ様々な先行する思想が混じりあっている。永遠を喚起する空は、ロマン主義者コールリッジの言葉を借りて、「理性」のタイプ、象徴であると言う。啓蒙主義、ロマン主義を経て、エマスは次に自身の名づけ方を提案する。そして、「自然との関係で考えれば」、理性は「霊」であると言う。この自然の創造力の根源である「霊」は“Genius”と呼ばれて然るべきだが、伝統的な“Spirit”を使っている。さらに続けて、“Creator”、“FATHER”と呼ばれると、キリスト教文化の優勢に自然は消えてしまう。

続く段落では、有名な「人間はアナロジスト(類似を認識する者)である」(21)と人と物との切っても切れない関係を敷衍していく。自然とその *genius* を主張する意図は持っているのだが、読者として想定されている都市住民に受け入れられる言葉を探して、自然を言語に利用することの効用を説くために、自然を利用し支配する人間という構図から抜け出せない。それを変えるのが、第3の命題、「自然は精神の象徴である」の提示だ。エマスは自然に優越していると思っている人間と、人間が類似の対象を求める先の自然とを比較して、愉快な比喩で反論する。

But how great a language to convey such pepper-corn informations! ...  
We are like travelers using the cinders of a volcano to roast their eggs.  
Whilst we see that it always stands ready to clothe what we would say,  
we cannot avoid the question, whether the characters are not significant  
of themselves. (23-24)

自然は人間よりも大きく、人間が認める以上の意味をもっているのではないかと、エマスは問いかける。そして、“the whole of nature is a metaphor of the human mind.”と応えるとき、自然は人間も気づいていない精神を表わしていると考えている。隠喩的であるとは、自然が人間と類似していること、自然の全体と人間とが関係していること、つまり、自然が人の無意識でもあることを

示唆する。“Genius”のような生命の根源的な原因は無意識に属するとエマソンは考えており、次の引用部分は「神」という言葉で説明されてはいるが、それは自然の存在としての人間に潜在する無意識を説明するものと考えられる。

This relation between the mind and matter is not fancied by some poet, but stands in the will of God, and so is free to be known by all men. It appears to men, or it does not appear. ... There seems to be a necessity in spirit to manifest itself in material forms; and day and night, river and storm, beast and bird, acid and alkali, preexist in necessary Ideas in the mind of God, and are what they are by virtue of preceding affections, in the world of spirit. A fact is the end or last issue of spirit. (24-25)

引用の最初の3行は、エマソンの同時代人に理解されなかった部分であったと、Elizabeth Palmer Peabody が前出の書評に取り上げ解説しているが、「精神と物質の関係」はエマソンにも「まだ解けない問題」だと彼女も結論を明言はしない。しかし、これは『自然』の提示した根本的に重要な問題であり、エマソンは一つの答えを出そうとしている。引用では省略した部分で、この問題に取り組んできたエジプト、インド文明以来各時代の天才“genius”への言及があり、19世紀を代表してエマソンは、「精神には物質的な形で現れる必然がある」、つまり、「必然」という言葉によって、運命的な霊と自然との一致、同質性という考えを提示している。「先行する愛情」が暗示するのは「自然の長い周期性」であり、自然の創造力によって、物質世界が作られていくことを、「事実は霊の最終的な或いは最後の発現だ」という表現は示している。この場合の「霊の世界」の“spirit”も“genius”と言い換えることが可能であろう。また、「神の意志」或いは「神の心」と呼んでいるものを、人間には分からない人間の精神の創造に関わる部分、生命力としての無意識と読みかえれば、第3の命題は「自然は自然の創造力のシンボルである」、自然は神のものではなく、自然のものであるという、自然観、世界観の根本的な転換を含んでいると言えよう。

『自然』の序章で、エマソンは「今、説明されていないだけでなく、説明できないと思われている」ものとして、「言語、眠り、狂気、夢、獣性、性」(7)をあげた。言語以外は、無意識とすぐに結びつくものだが、やや唐突に序章で言及されたまま、その後の展開に目立った言及はない。言語については、その象徴性、隠喩を指摘することによって、文明が自然を無意識に抑圧してきたことを明らかにした。「言語」の章の最後で、クウェイカーの祖、George Foxの言葉、「どの聖典も、それを生み出したと同じ精神によって解釈されるべきだ—それが批評の根本法則だ」を引用して、エマソンは自然という聖典を、自然に由来する精神で読むことを勧める。そうすることで無意識が開かれ、「精神と物質との関係が現れる」、それが「透明な眼球になる」瞬間であった。第1章「自然」のその記述の後で、エマソンは次のように言う。

In the wilderness, I find something more dear and connate than in streets or villages. (10)

自然のなかに見出す「何か性の合うもの」とは 自身の内に潜む自然に由来する“genius”を指している。エマソンがここで使った“connate”という語もまた *OED* が引用している。同じ意味で“cognate”という言葉もあるが、“connate”は、「誕生の時からその人・物に存在する」という“genius”を指示する意味もあれば、動植物学や地質学の用語としても使われるなど、エマソンの「博物学」への関心に深く関わる言葉だ。そして、“connate”は“innate”と同義でも使われるので、カルヴィニズムの“innate depravity”を連想させる語形を選び、それへの対抗姿勢を密かに明らかにする。

自然は墮落したものではない、進化の過程が暗示するように、物質は精神をもっと微妙な関係で形作っている。『自然』には、ピューリタン文化の限られた世界から、時空において広大で強力な生命の世界へと人々を解放しようとする意図が、垣間見える以上に見て取れる。エマソンが描く自然の中で人が感じる高揚感は、人と自然の共通の生命力の根源である“genius”或いは小文字で書かれる“spirit”の動きを意識することによる。前述の「人に現れたり、現れな

かったりする」(24)これらの「霊」は、無意識から気紛れに浮かび上がるいたずら者だとエマソンは考えている。詩の中では、“elf” や“goblin”など、<sup>9</sup> 土俗的な精霊、陽気な悪戯者のイメージを持つ言葉で、超自然的というよりはむしろ自然な非日常的感覚の現れを示している。エッセイ “Self-Reliance”においては、“genius”の到来は “Whim”という言葉で表された。エマソンは、自然に由来する捉えがたく説明できないものが、取るに足らないものでないことを、外界の自然にも人間の内なる自然にも霊的なものがあることを示すことで、都市文明が洗練してきた文化に対して、人間の根源的な力の全体を回復しようとする。物理的自然がその全体性にとって必要な概念であると直観した点において、エマソンの関心が根本的には形而上学的であるとしても、19世紀後半から20世紀にかけて展開する反形而上学的思想の先駆けとなるエマソンの現代性が際立つ。

注

1. B. L. Packer, *Emerson's Fall: A New Interpretation of the Major Essays* (New York: Continuum, 1982), pp. 28-29.
2. Merton M. Sealts, Jr. and Alfred R. Ferguson, *Emerson's "Nature": Origin, Growth, Meaning*, Rev. ed. (Carbondale: Southern Illinois UP, 1979), p. 39.
3. Elizabeth Palmer Peabody, “Nature—A Prose Poem”は、詩的であること肯定的に捉えている。 *Emerson's Prose and Poetry* (Norton Critical Edition,) eds. Joel Porte and Sandra Morris (New York: W.W. Norton & Co., 2001), p.590.
4. エマソンのエッセイと詩の引用は、*Ralph Waldo Emerson: Essays and Poems* (Library of America College Edition), eds. Joel Porte, Harold Bloom and Paul Kane (New York: The Library of America, 1996) による。
5. 「自然の長い周期性」については、拙稿「“The Secularity of Nature”—エマソンのエッセイと詩—」において、初期の詩との関連を論じた。*Philologia* 第43号 (2012) pp. 35-48.
6. Ralph Waldo Emerson, “On the Relation of Man to the Globe,” *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*, eds. Stephen E. Whicher and Robert E. Spiller (Cambridge, Mass.: The Belknap P of Harvard UP, 1966), p.48.
7. *Ibid.*, p.28.

## エマスの『自然』における “Spirit” と “Genius”

8. エマスはエッセイ “The Poet”では、“For all symbols are fluxional; all language is vehicular and transitive, and is good, as ferries and horses are, for conveyance, not as farms and houses are, for homestead. Mysticism consists in the mistake of an accidental and individual symbol for an universal one.” (463-464) と述べ、同様の生成し続ける自然の全体を象徴とする、固定的でない流動的な言語観を表している。
9. “elf” という言葉は “Woodnotes I”で、“goblin”は“Two Rivers”で使われている。

本稿は平成22年度 - 24年度科学研究費補助金基盤研究(c)「エマスの詩とその現代性についての研究」(22520239)の研究成果の一部である。